2008年度　教養文化研究所　活動報告

2008年度　教養文化研究所主催公開講演会

第１回

2008年６月９日（月）　13：30　～　15：00　　於7405教室

講師：安積遊歩氏　「当事者から見た共に生きる社会とは？」

第２回

2008年11月19日（水）　17：00　～　18：30　　於第２講義棟15Fホール

「ジョン･チャヌ　バイオリンとトークの夕べ」

2008年度　教養文化研究所研究懇話会

第１回

2008年５月29日（木）　18：00　～　19：00　　於第１会議室

黒田基樹　「日本中世における年期売買について」

第２回

2008年６月26日（木）　17：00　～　18：00　　於7207教室

伊藤雅道　「ミミズあれこれ――自然史と環境」

第３回

2008年10月30日（木）　17：30　～　18：30　　於第１会議室

角田京子　「20世紀女性自然科学者達におけるジェンダー逸脱とハイポセクシュアリティ――リーゼ･マイトナーと湯浅年子を中心に」

第４回

2008年11月27日　18：00　～　19：00　　於第１会議室

海老澤豊　「十八世紀英国における農耕詩」

第５回

2009年３月５日（木）　16：30　～　17：30　　於第１会議室

國分俊宏　「詩と言語実験――ルーマニア出身のフランス語詩人，ゲラシム・ルカについて」

黒田基樹　　日本中世における年期売買について

本報告では，人々の生存・生活において不可欠の要素をなすものの一つに貸借関係があるという考えに基づき，日本中世における売買・貸借の実態解明をすすめるための一作業として，中世における年期債務契約（年期売・年期明請戻特約本銭返など）について取り上げ，検討した。

具体的には，東国において最も多くの売券類を残している下総香取社関係文書（以下，「香取文書」と称する）と，全国のなかで最も多くの売券類を残している紀伊熊野社の御師関係文書（以下，「熊野御師文書」と称する）を事例に検討した。詳細な事実関係については省略するが，いずれも年期売券類は13世紀以降の中世後期から残存していること，年期契約の内容について，契約年期の長さや物件と売買・債務額との間には法則性は認められないこと，「香取文書」では契約年期は10年期を基本にして五の倍数のものが主要であるのに対し，「熊野御師文書」では10年期と12年期が基本になっているというように，地域ないし集団によって基本的な在り方に差異があったことがわかる。

その一方で，「香取文書」「熊野御師文書」ともに，契約年期は10年期が圧倒的であり，ここから中世後期における年期契約は10年期が基本的な在り方にあったととらえられる。そしてこれについては，時効法との関連が考えられる。中世には債務の時効法が存在しており，10年・20年が基本にあった。年期売買における年期の基本が10年というのは，この時効法の存在と表裏の関係にあるととらえられる。さらにこうした時効法そのものが，「相対による徳政」にあたるととらえられるから，売買・貸借の在り方は，徳政の在り方とも連動するものであったととらえた。

なお詳細については拙稿「年期売買に関するノート」（『千葉県史研究』16号，2008年）を参照されたい。

教養文化研究所・第２回研究懇話会報告　2008年６月26日

伊藤雅道

ミミズあれこれ
――自然史と環境――

ミミズは美しい，と思っているのは私のような専門家のみで，大方の人々は気味の悪い動物だと思っているに違いない。まあ，それはそれで仕方ないが，しかしこのミミズ，大きな生態系機能を持ち地球の環境を支える存在であり，また動物学的にも大変興味深い動物である。今回はその概要を紹介する。

ミミズは古くはアリストテレースの「動物誌」に「大地のはらわた」との記述があり，18世紀英国の「セルボーン博物誌」にもミミズの土壌生成作用についてのかなり正確な記述が見られる。これを近代的な自然科学の対象としたのはかのダーウィンであり，以後20世紀に入るとミミズの科学的研究は大きく開花することとなった。

そうした現代科学の研究成果によると，ミミズは土や落葉の摂食，移動，排糞を繰り返すことによって土壌を撹拌し，団粒に富んだ植物の成長には良好な土壌を作り上げる。ミミズの糞塊生産は多いところでヘクタールあたり年間数百トンにも及ぶ。また，ミミズは土壌微生物の共同によって有機物の無機化を促進し，植物の成長を支える。つまり，全体としてミミズは地上の生態系の繁栄を下支えする土台のような機能を持っているのである。

ミミズの名は「目見えず」から由来するそうだが，一見眼は存在しないようであり，脚もなく，どちらが口でどちらが肛門かもはっきりしないように見える。下等な動物であると思われがちであるが，脳もあるし，心臓もあって赤い血が流れている。中生代以降に地球上に新しく誕生した「土」というフロンティアを開拓するために進化したエリートなのだ。長細いからだ，体の滑りを防ぐ剛毛，狭い隙間では驚くほど速く移動できる蠕動運動，数少ない「出会い」を無駄にしない雌雄同体，カプセル状のコクーンの中への産卵など，どれもが動物学的にきわめて魅惑的な研究対象である。

ミミズは我々の目に見えない土の中で生活しているため，まだまだわからないことだらけである。繁殖行動や摂食生態など重要だが未解明の分野は多い。私は分類研究が専門であるが，日本産のミミズはまだ新種が続々と発見されるという段階であり，少なくとも既知（約80種）の倍の種が日本に存在しているものと予想している。この不思議な隣人たちに多くの人々が興味をもつことを期待している。

角田京子

20世紀女性自然科学者達における ジェンダー逸脱とハイポセクシュアリティ

――リーゼ・マイトナーと湯浅年子を中心に――

人間に適用されるジェンダー概念は，既にそれ自体，ジェンダーからの逸脱が生じることを含意している。逸脱と抑圧というダイナミズムの中で，複雑で豊穣なジェンダーが育まれてきたとも言えるだろう。このダイナミズムによる緊張は，とりわけ前世紀までの女性科学者において顕著である。20世紀は世界的に女性の社会進出が進んだ時代であったと言われているが，そもそも女性が社会活動を営むことがジェンダーからの逸脱であった。しかも創造的な活動ほど女性には不適であるとされ，さらにその中でも自然科学は女性には向かない分野とされて，女性研究者のジェンダー逸脱の謗りは免れようもなかったのである。

このことは，科学史や女性学の視点からは社会現象として捉えられて既に多くの言説があるが，本研究では臨床的視点からもう一つの問題点を指摘したい。それは女性科学者の――あまり詳しくもない――伝記から推測されることであるが，彼女達のセクシュアリティの偏りである。彼女達は自らのセクシュアリティについて無関心であるかあるいは抑圧的であって，伝記上夥しいロマンスに恵まれた者はいない。ところが文学や芸術の分野で活躍した女性達は，ジェンダーからは逸脱していても，必ずしもハイポセクシュアルではなく，むしろフリー・ラヴの実践者であった者も多い。こうしたことから，女性が自然科学において創造性を発揮できた背景には，単に前世紀的なジェンダーからの逸脱があっただけではなく，ハイポセクシュアリティの関与もあったのではないかと推測されるのである。

さらに彼女達の生活環境と研究姿勢を臨床的に観ると，次のような諸傾向を挙げることができる。１）父親への同一化，それに続く研究分野での父親的庇護者への崇拝，２）自我同一性の不確かさ，性同一性の問題の回避，３）研究のために越境し不遇に耐えたこと。こうした諸傾向は，もちろんジェンダー逸脱やハイポセクシュアリティと関連している。その反面，晩年まで高いレベルの研究を続けることができた彼女達には，たとえサブクリニカルな問題があったとしてもおそらく軽度であり，強靭で健康な自我があったことも推測され，いわば文化的要請には応じないシュード・アイデンティティを確立していたとも言える。

本研究発表では，前世紀の原子核物理の領域において核分裂を同定・理論化したリーゼ･マイトナーと日本人女性で初めて国際的に認められた湯浅年子を取り上げ，その伝記から以上のような臨床的問題と創造性との関連を検討した。

海老澤豊

十八世紀英国における農耕詩

十八世紀の英国では，ウェルギリウスの『農耕詩』は，叙事詩と牧歌の特徴を兼ね備えた最も重要な様式と考えられた。1697年にドライデンが英訳した『農耕詩』と，その序文として書かれたアディソンの「農耕詩論」を契機に，フィリップスの『林檎酒』を直接的な模範としながら，詩人たちは英国風の農耕詩を発展させていった。ジョン・ゲイの『トリヴィア：ロンドン街路歩行術』（1716），ウィリアム・サマヴィルの『狩猟』（1735），ジョン・ダイヤーの『羊毛』（1757），ジェイムズ・グレィンジャーの『砂糖黍』（1764），ウィリアム・メイソンの『英国の庭園』（1771–81）など，詩人たちは次第に主題を狩猟，交易，医術，造園術など農事以外のものに拡大し，人間のあらゆる営為を総体的に表現しようと試みたのである。

彼らの農耕詩に共通するのは，技術と労働によって鉄の時代を生き抜こうとする意思である。また故郷の産物を賛美することが，やがては帝国主義的な拡張を目指す英国全体の賛美や，諸外国に対する母国の優位を歌うことにつながっていく。また英国風農耕詩は「上からの視点」，「公的な声」に貫かれており，どこか古き良き時代に対する「懐古的な趣味」を湛えている。

農耕詩は描写と教訓のバランスの上に成り立つ様式であるが，十八世紀後半になると抒情詩の復活にともなって，教訓を嫌い描写や物語を重視する傾向が強まっていく。アディソンが示した教訓からの「脱線」がいよいよ発展していく結果となったのである。農耕詩は十九世紀になるとすっかり廃れてしまうが，「脱線」など長編詩を書くための有効な手段はロマン派の詩人たちに受け継がれていくのである。

教養文化研究所・第5回研究懇話会報告　2009年3月5日

國分俊宏

詩と言語実験
――ルーマニア出身のフランス語詩人，ゲラシム・ルカについて――

2008年度，現代文化学部の長尾建専任講師とともに，「詩と言語実験」というテーマで共同研究費の助成を受けた。本報告は，その研究の経過報告として発表させていただいたものである。

19世紀末から20世紀初頭にかけて，フランスの文学・芸術分野で，多くの言語実験が試みられた。そのひとつは，たとえばレーモン・ルーセル（1877–1933）の作品である。『アフリカの印象』，『ロクス・ソルス』を初めとする彼の主要な作品のほとんどは，「プロセデ procédé」と呼ばれる特殊な言語遊戯に基づいて書かれた。そのためにその作品には，奇怪なオブジェや不思議な機械などが次々と登場し，突拍子もないエピソードの連続となる。彼はしかもそれを自ら芝居にして上演したために，当時の前衛芸術運動であるシュルレアリスムの詩人や芸術家たちから熱狂的な支持を受けた。ルーセルはこうして前衛作家としてみなされることになるが，本人にはその意識はなく，その趣味はむしろ伝統派といってもよいものだった。しかし，ルーセルの言語遊戯は，同時代のジャン・コクトーなどの言語実験とも相通じる試みであり，文学と言語の関係を問い直し，人間にとっての言語の意味を考える上で大きな意義を秘めたものだったと言える。さらにレーモン・クノーやジョルジュ・ペレックなど，直接ルーセルから影響を受けた重要な言語実験文学の担い手も生んだ。

ところで，これらの言語実験は，あえてまとめれば言葉の多義性を利用した（同音異義語など）ものとして理解できる。それは意味のレベルでの遊戯という点で，いわば言語の垂直性に依拠した試みである。それに対して，ゲラシム・ルカ（1913–1994）というルーマニア出身のフランス語詩人がおこなった言語実験は，徹底して言葉の表層をすべっていく「パロール」（話し言葉）の次元による詩的実践として位置づけることができるのではないだろうか。実際，ゲラシム・ルカの詩は「音の遊び」という側面が強く，本人も自作詩の朗読の活動を積極的に行っていた。「一つの語で二つのことを言おうとする」垂直性の言語遊戯というものが一方にあるとしたら，ゲラシム・ルカの詩は，朗読という直線的・水平的な（一方向にしか進まない）言葉の実践と切り離せないものであると言えるだろう。